

振興会ニュース

第 9 号

1998年8月

日本バスケットボール振興会

目 次

- 3月開催の理事会の概要 1
 － J B L に関して活発な討議－
- 5月開催の春季役員会の概要 7
 － 新しく28名の方が会員に－
- 特別懇談会が開催されました 13
- 普及懇談会が再発足－ミニバスケット用資料の作成等－(大塚 周一) 14
- 「第13回女子世界選手権大会」同行記(橋本 弘昭) 15
- 日本家庭婦人バスケットボール連盟設立にあたって(山田 洋子) 20
- 新しい会員から一言 21
 阿部 進 井上 康平 壁谷 道明 葛尾 和弘
 黒板 行二 桜井 鴻臣 成瀬 璋 浜本 清海
 松本 民子 渡辺 勝己
- 討 報 28
 故 三栖 一夫氏
- 事務局だより 28



『第13回女子世界選手権大会』 同行記

日本バスケットボール協会広報部 橋本 弘昭

今大会は、5月26日～6月7日迄の約2週間、FIBAの地元であるドイツにて世界各地域から16チームが参加して行われた。競技方法は、1ブロック4チームで、4ブロックに分かれ、1次リーグを行なう。1次リーグ上位3チームが、それぞれ2ブロックにわかれ2次リーグへ進み、2次リーグ上位4チームがベスト8となり、決勝トーナメントへ進む。

(1) 1次リーグ

1次リーグはドイツ国内4会場で開催され、日本はアトランタオリンピック優勝のアメリカ、ヨーロッパ選手権優勝のリトアニア、そしてアフリカ1位のセネガルと強豪が集まるBブロックで戦うこととなった。開催地は、フランクフルトから約140Kmほど南、またはシュツットガルトから約70Km南西に位置するカールスルーエで行われた。この街は市の中心部に城を構えた古きドイツの佇まいが残る南ドイツの田舎町である。試合会場はホテルから専用バスで12～3分の郊外にあり、室内トラックがある多目的室内競技場(Europa halle収容人員5,000人)で行われた。

大会開催中、当地は祝日に当たり会場の外では、小学生から一般まで参加して3on3の大会が行われ「世界選手権大会」を盛り上げていた。

5月26日、1次リーグの第一戦は、優勝候補No.1のアメリカと対戦。第1試合のリトアニア対セネガル戦のアフリカンビートの余韻を残したまま第2試合の日本対アメリカ戦が始まった。試合はレスリー、ウィリアムズと長身者を擁するアメリカがインサイド攻撃を中心に攻め込んでくるが、日本も村上のドライブイン、萩原、加藤らの外角からのシュートで対抗し前半を43-44とピットリマークする。後半に入り、日本のインサイド封じのディフェンスに対しアメリカは外角からのシュートに転じ、点差を広げにかかる。日本も激しいディフェンスからギリギリと詰め寄ると会場は「ヤパン、ヤパン (japan)」コールで盛り上がり87-91と4点差にするが、最後は外角のシュートがはずれ89-95と逃げ切られた。負けたとはいえ、内容的には日本のゲームであった。

ゲーム終了後の共同インタビューでも中川ヘッドコーチが「あわよくばアメリカに勝って世界をあとと驚かせたかった」と言うほどすばらしくまさにアトランタオリンピックを再現したようなゲームであった。

5月27日、第2戦はアフリカ1位のセネガルとの対戦。試合は前日と一転して苦しい展開となった。セネガルの激しいディフェンスと手足の長さで翻弄され一時は10点のリードを許すゲームとなったが、前半終了間際、大山の3Pなどでようやくリードし39-36で折り返す。

後半になってもセネガルの執拗なディフェンスは変わらず、なかなか引き離せず逆に詰め寄られる。日本はようやくタイミングのいい3Pなどで73-66とし薄氷の思いで勝利した。

5月28日、第3戦はヨーロッパ1位のリトアニアとの対戦である。ようやくの思いで勝った前日の気分を一新したこの日の日本は、目を見張るような3Pを次々と決め103-94と3桁得点で快勝した。3Pのアベレージが実に75%と驚異的な出来であった。おまけに、世界選手権大会で過去ヨーロッパチームを相手に100点ゲームをしたのは今回がはじめてである。



(2) 2次リーグ

5月29日、1次リーグを2勝1敗で通過し目標のベスト8入りに向けカールスルーエを後にし、一路列車で2次リーグの開催地、ブレーメンへと向かった。出発の朝、カールスルーエの駅で、この日誕生日を迎えた川上選手にドイツ協会の粋な計らいによる花束のプレゼントがあった。気持ち良く送り出してくれたカールスルーエを後にし列車に乗り込んだ。ブレーメンへはカールスルーエから特急で約6時間の長旅である。2時間ほど行くと列車はライン川添いの美しい景観を見せてくれた。まるで『世界の車窓』を思わせる景色が続きしばしバスケットを忘れさせる。この景色も何十分も続くと選手も感嘆の言葉もなくなり、いつしか寝息に変わっていった。

長旅も終わりいよいよ2次リーグの地のブレーメンに到着。明日からの試合に備え夕方から軽い練習を行った。練習後、体育館を出たところでハプニングが起こった。今日誕生日の川上選手に対しチーム恒例?の顔一面に当たるシェービングケーキの祝福があった。

ブレーメンは‘ブレーメンの音楽隊’として童話ではおなじみであるが、駅から5分ほどの川を越えると中世ヨーロッパの街並みが残る歴史の街である。駅を挟んで表側が宿泊先のホテルや商店街が並び、裏手に2次リーグの会場となる体育館 (Stadthalle Bremen 収容人員6,000人) がある。体育館へはホテルから徒歩で駅を抜け5分ほどで行くことができる。ここでも会場の外で3on3のイベントが行われていた。

5月30日、2次リーグの緒戦はスペインである。ここに勝てばベスト8は間違いなかつ

た。が、試合はスペインのスピードある攻撃とポストプレイに翻弄され、日本の頼みの3Pもことごとくはずれ結局58-97と大敗した。

5月31日、第2戦はロシアとの対戦。バルセロナオリンピックでCIS（独立国家共同体）として金メダルをとったゴメルスキー監督が指揮をとり、その当時の選手も復帰するなど勝利への執着心は貪欲なものがある。そのロシアは190cm台を二人投入し高さで圧倒する。動きのいいセンターにゴール下を支配され、攻撃の糸口がみつからずせっかくのチャンスもターンオーバーで自滅し76-103と大敗した。

6月1日、2次リーグの最終戦はアジアの強敵中国との対戦である。国内での4ヶ国大会で中国に2勝している日本であったが、そこは中国。アトランタオリンピックのベテランガード鄭冬梅を復帰させ万全の体制をとる。試合は「世界のビッグセンター」鄭海霞をベンチに休め、将来の中国の攻撃パターンになるであろう190cm台のセンターを二人インサイドに付ける布陣に出る。やはりこの2人を中心にインサイド攻撃をうけ、前半を37-49と差をつけられる。

5点差以内ならベスト8の希望がある日本は後半、中川ヘッドコーチの「思い切っていけ」の指示で気持ちが吹っ切れ、萩原、岡里らがつぎつぎに3Pを決める。更に加藤がステップインで逆転し、最後まで激しく戦ったが、1点差で逃げ切られた。この結果、日本は次のリトアニア対スペイン戦の結果待ちとなった。リトアニアがスペインに負けると日本がベスト8へ進出が決まる。他力本願に望みをかけたが、リトアニアが勝ち、目標であったベスト8入りは果たせなかった。

残念ながら、ベスト8入りはできなかったものの、9位～12位決定戦に望むべく‘ツキ’のなかったプレーメンを後にした。

（3）順位決定戦

6月2日、順位決定戦が行われるベルリンへは、プレーメンから特急で約4時間の道程である。道中の景色は1次リーグからの移動とは異なりあまり起伏がなく平坦で牧歌的な車窓が続く。ボン、ポツダムと近代史のページに名を残す街並みを通り過ぎ、いよいよ東西統一後のベルリンに入る。ゆっくりと駅に向かう列車の窓からは第二次大戦の傷跡を残す教会をとらえている。

そして、一行は日本の夏を思わせるような蒸し暑い空気を吸い込み、ベルリンの地に第一歩を踏み入れた。2次リーグを戦い終えた12チームはそれぞれチャーターされたバスに乗り込み全チームが同宿するホテルに到着し長旅の疲れを癒すべく部屋へたどりついた。

翌日は本番に備え各チームとも練習日になっている。試合会場は、ホテルから専用バスで15分ほどの旧東ドイツ側の競技場（Max-Schmeling-Halle 収容人員9,000人）で行われた。途中、一部‘ベルリンの壁’が残る旧東側の街並みは、旧西側と比べるとやや見劣りする気がした。今、ベルリンは至るところクレーンや建築資材が置かれ、再開発の槌音がしていた。

6月4日、9位～12位決定戦は地元ドイツとの対戦である。

日本は高さのドイツに対して速さとシュートの正確さで対抗する。立ち上がり、日本は

相手のミスも手伝って序盤からリードする。ドイツはインサイドにボールを集めるが、浜口が相手のセンターをしっかりブロックして得点を許さない。日本は効果的な3Pと速い攻撃などで終始リードし地元ドイツを相手に88-71と快勝した。

6月5日、いよいよ日本にとって今大会最後のゲームとなる9位決定戦は延長戦のすえ中国を下したハンガリーとの対戦である。ハンガリーは他のヨーロッパチームと比べてセンターが190cmと際立った高さではない。フォワードはスピードはあるが、ディフェンスの粘りが弱い。

試合はハンガリーが3Pを含む外角のシュートなどで先手をとるが、日本は浜口の2P、大山のドライブインシュートなどで追いつき、さらに村上の3P、加藤の2Pなどで一気に逆転する。その後は日本の速い攻撃でリードを広げ、終わってみれば108-82と日本チームが挙げた得点としては今大会最多得点で最終ゲームを締め括った。

日本は今大会4勝4敗とし当初の目標であるベスト8入りはなかったが、前大会の12位から3ランクアップの9位で日程を終了した。大会はアメリカがロシアを接戦の末破り2大会ぶり6回目の優勝を果たした。

(4) 大会終わって

今回広報部員としての仕事はしてきたつもりだが、こと日本チームに対して「広報」の役割はどうだったのかと自問するところがある。たとえば、日本チームと対戦するチームのゲーム結果や他会場の結果をタイムリーにアシスタントコーチに報告したか、現地のマスコミの取り上げ方、日本での報道のされかたをチームに伝えたかなど、少しでもチームの士気に役立てたのか反省するところである。

帰途の前日、ヘッドコーチをはじめアシスタントコーチ、ドクターそしてレフリーの小池氏と男性スタッフだけで雑談する時間があり、その中で2つほど話題になったことがある。



一つは、「ヨーロッパスタイル」？のシュートステップの取り方、もう一つは「3秒オーバータイム」についてである。ヘッドコーチは「日本とヨーロッパではジャッジに違いがあり、このスタイルで攻められると防禦がない。これが許されるのであるなら、日本でも同じジャッジにしてもらいたい。」と指摘していた。これに対してレフリーからは、「基本はあくまでもFIBAのルールに則っている。この辺については、チームや審判のなかでも研究する必要があるだろう。」との意見であった。

また、レフリーからも「こんな大きな大会には帯同審判だけではなく、世界の動向・若手の育成など将来に向けもう1名参加させるべきだ。今回でも40代のレフリーは数少ない。女性レフリーも3名派遣されている。このままでは日本は立ち後れてしまう」との意見もでた。

余談になるが、アシスタントコーチがビデオを見るためビデオルームの鍵を開けてもらい中でウロウロしている（表現が不適切かもしれませんが）ところに、アメリカチームのスタッフがやってきた。彼はアシスタントコーチに向かって「ここで何をしているんだ！」とスパイをしているかのごとく懐疑の目を向けたそうです。後で判ったことですが、そこはアメリカチームが借りていたビデオルームで、ホテルのミスでその鍵を開けてしまったそうです。しかし、アシスタントコーチはそこで、ビデオ機材、ビデオテープ、専用のコピー機等豊富な物資を目の当たりにしたそうです。日本とアメリカを単純に比較できないが、選手と同じくらいのスタッフと1ルームを借切るほどの大量な物資を投入するアメリカチームの大会に臨む姿勢、支援体制を垣間みた感がある。

今大会の結果、2000年のシドニーオリンピックのアジア枠は1つになってしまった。日本がセンタープレイヤーが豊富にいる欧米チームを相手に9位にはなったが、アジアでは常にトップのポジションに居座るには全日本チームだけの努力では限界がある。それには、各組織がときには壁を越えて支援する体制が必要ではないだろうか。たとえばオリンピックや世界選手権、アジア選手権などには「×××選手権支援プロジェクトチーム」なる臨時の支援チームを組織し資金、物資をも調達できる体制がとれば理想である。チームスタッフ、選手が‘強く’なるとともに周りの体制も‘強く’なることが必要であると感じた。

日本チームが益々強くなることを願って『第13回女子世界選手権大会』同行記と致します。

大会期間：1998年5月26日～6月7日

開催場所：ドイツ＝ベルリン、ブレーメン、ミュンスター、カールスルーエ、ヴァーバートル、ローテンブルク／フルダ、デッサウ

順位：1位 アメリカ、2位 ロシア、3位 オーストラリア、4位 ブラジル、
5位 スペイン、6位 リトアニア、7位 キューバ、8位 スロバキア、
9位 日本、10位 ハンガリー、11位 ドイツ、12位 中国、13位 韓国、
14位 セネガル、15位 アルゼンチン、16位 コンゴ

日本家庭婦人バスケットボール連盟設立にあたって

日本家庭婦人バスケットボール連盟

理事長 山田洋子

日頃日本バスケットボール振興会の皆様には、家庭婦人のバスケットボールについてご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

お陰様で年ごとに家庭婦人バスケットボール愛好者が増え、従ってチームが増え、都道府県連盟を設立するところも増えて参りました。数年前から中央の組織がないのはおかしいとの声もありまして、連盟を作るにはどうしたらよいのか、連盟とはどうあるべきなのか、今連盟を作るのは適当なのだろうか等々話し合い検討致しました。その結果、やはり連盟組織を作り全国に広めていこうという事になり、2年に亘り普及部ママさん委員会による準備委員会と全国協議会において準備を進め、日本バスケットボール協会理事会で承認されました。そして日本家庭婦人バスケットボール連盟が日本協会の普及部直轄の任意団体として認められることになり、昨年7月に連盟が設立、24都道府県連盟、加盟登録チーム347、加盟登録人数5415人でスタートすることになりました。

お母さん達のバスケットボールを奨励することは、将来のミニバスへ、中学への育成につながり「家庭婦人バスケットボールは普及発展への原点」と私たちは考えております。まだまだ手探りの状態ですが家庭婦人の方々の熱意と努力によってやがて大きな力となることを確信致しております。

日本家庭婦人バスケットボール連盟に対し、ご理解いただき応援をしてくださる振興会の皆様に心から御礼を申し上げますとともにこれからもよろしくお願い申し上げます。

日本バスケットボール協会が主催する全国家庭婦人バスケットボール交歓大会も、今年で17回を迎え80チーム約1100名が参加致しました。好きなバスケットボールとはいえ仕事に、家庭に、育児にと忙しい中で長年続ける事は家族の理解とチーム内の協力があることであり、その周囲を取り巻く環境にも恵まれていることに感謝しなければなりません。大会中はすべてを忘れて(?)バスケットに夢中です。顔見知りのママさんもいると思いますのでこれからも機会がありましたらぜひお出かけ下さい。

最後に日本バスケットボール振興会の益々のご発展と会員皆様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。

なお、第17回全国ママさんバスケットボール交歓大会（日本家庭婦人バスケットボール連盟設立記念大会）の結果（優勝チーム）をご報告させていただきます。

Aブロック	栃木オールスターズ（栃木県）	Bブロック	フカガワ（長野県）
Cブロック	松戸レディス（千葉県）	Dブロック	商工かつみクラブ（神奈川県）
Eブロック	M&M（東京都）	Fブロック	NBC（東京都）
Gブロック	秋田FDI（秋田県）	Hブロック	ジョニーズmama（神奈川県）
Iブロック	GANBABA大阪（大阪府）	Jブロック	多賀リフレイン（茨城県）

思い出すまま
思うまま

阿 部 進



私とバスケットボールの関わりは、新潟高・早稲田大学での選手生活、最近では東芝バスケット部の活動を社内で支援していることです。旧制の新潟中学が学制改革でそのまま高校になったため、6年間同じ環境でバスケットに熱中することが出来ました。戦前2度の全国制覇を遂げた新潟中学の先輩には、早稲田で活躍された小田先輩、戦後復活時の関東大学リーグ優勝の帝大（東大）の黒川・真壁先輩、さらにNHKの高橋修先輩等がおられます。

昭和22年戦後初のオールジャパンに新潟倶楽部が優勝したり、翌23年のオールジャパンが新潟市で開催される等バスケットには恵まれた環境でした。高校時代のライバルは今泉さん、泉さんの北越商業でした。インターハイの県大会決勝で敗れたゲームの最後の3分間の攻防は今でも鮮明に思い出します。早稲田では下間君と同期で、立教大学の全盛時代でした。理工学部と部生活の両立に苦労はしましたが、大庭先輩、森澤先輩、小出先輩等多くの理工科の先輩がおられた事は大きな心の支えでした。

東芝では、役員の立場からチームの強化充実が日本のバスケット界の発展につながるよう社内で、私なりに努力したつもりです。昨年から顧問に就任し、引き続きチームの支援をしています。

昨今の厳しい会社経営環境の中で、「企業スポーツのあり方」も今までとは違った変革が求められています。社会貢献、企業イメージ、商品PRなど「費用対効果」の考えが基本にある事が現実ですが、私は「企業活力の醸成効果」を声高にしたいと思います。東芝では、スポーツチームを工場に所属させ、強化スポーツに指定されると、全社的な支援を得ることになります。

工場の総務部長が部長としてチームを統括し、工場長は後援会長としてバックアップし、応援団も結成されます。後援会は工場の従業員を中心に全社に輪が広がり、資金カンパと共に部の活動ニュースが報告されます。

このようにしてチームと従業員との一体感が醸成されて行きます。組合の委員長も毎試合応援に駆けつけて、まさに労使一体となります。シーズン前後に行う激励会や慰労会では役員も大勢参加し、工場の体育館が満員になります。企業スポーツの効果には色々な側面がありますが、「従業員との一体感」が基盤になればならないと思います。

この一体感が選手のやる気を燃え上がらせ、世

界に通じるバスケットを目指し、一方では、チームの活躍が工場の活力に浸透していく事が「企業スポーツの持続的発展」につながるものと思います。



日本的な事情について

井上 康平



日本の少年が「如何様なフォームでシュートすれば成功するか」ときくの、他の国では「如何様なときにシュートすれば成功するか」ときくのが通例なのだという。これには、島国の日本人が、つい最近まで農耕民族だったことに関係があるらしい。

はじめて田植えをする少年は、多分「苗はこう持って、腰はこう屈めて・・・」といった教わり方をしただろう。他方、たとえば、初めて狩りにでる狩猟民族の少年は、「走っている猪を射るには、猪の速さに応じて、その前方に向かって射なければ当たらない」と教わったことだろう。型(形)にこだわる日本人のルーツは、このあたりにあるのだろうか。

また、弓を射るにも射程距離があって、そこまで猪に気付かれずに接近するには、さまざまな条件を満たす必要がある。無雑作な姿勢でみつけれないこと、粗雑な動作で物音をたてないこと、風上にたって嗅ぎつけられないこと、等々。そこでは、細かな目配りと気配り、慎重な身振りが必要となる。その上、手負いの猪の逆襲への備えも欠かせない。それを好機として、止めを刺せば申し分ない。そこから戦術戦略も芽生えてくる。

広範な状況の正確な把握、それによる行動の計画、そのためのよく制御された身心の状態の維持。いうなれば、集中と予測とタイミングワーク、柔軟で強靱なボディーワーク。狩猟には、球技スポーツが不可欠とする要素が十分に含まれている。

だが、種をまいて約半年、八十八の作業があるとはいえ、稲の成育を見守り、その手助けをする以外、基本的には天候まかせ農耕には、その要素は希薄だ。このあたりに、農耕民族の球技スポーツでの不利があると思う。

さらには、動くものを対象に、激しく変転する状況に身をおいた経験の過小なことから、戦闘とかスポーツで勝利を望むとき、日常にはない特別な心構えが、改めて必要となる。

「撃ちてし止まん」。「大和魂」は、現代の大規模な戦争には適さなかった。「ベストを尽くして死ぬ」では、複雑に変転する局面の連続である球技スポーツにも適していない。ベストを尽くして、いざシュートというとき、力尽きていさぎよく「散華」では、決定力もなにもあったものではない。なにかよい方途はないものだろうか。未だ日本人の身体の内には、農耕民族の血が流れている。

以上は、サッカーW杯をみての感想だが、B Bにも無関係とはおもえない。

コート探しの4年間

壁谷 道明



私が早稲田大学バスケットボール部に在籍していたのは、まだ戦後が色濃く残っていた昭和27年4月から昭和31年3月までの4年間であった。

当時の早稲田大学には屋内のバスケットボールのコートはなく、バスケットボールのコートといえば都電車庫の傍にテニスコートとバレーボールコートに挟まれたアウトドアのもののみであった。(現在はリーガロイヤルホテルになっている。)

コートは煉瓦敷きで片隅に手押しポンプの井戸があった。その為、練習用の屋内コート探しはマネージャーの大きな仕事で、それに掛かる費用も部の経費のかかなりの部分を占めていた。どうしても屋内コートが借りれない時は冬でもアウトのコートでの練習だった。

公式戦の中心は進駐車の接收から返還されたばかりの国民体育館であったが、ここは文部省の直轄で、練習には学連、実連が一括して借り有力チームに割り当てていた。それ以外に直接文部省に行き、朝8時から10時などの空いている時を借りたものだった。

杉野ドレメ学院の体育館も空いているときは有料で貸してくれた。費用は国民体育館の倍であったが場所も良く、よく利用させてもらった。その他では部員の出身校である成城学園の体育館や、部員がコーチをしていた関係で竹早高校の体育館などへ通ったものだった。竹早高校での帰りに都電で池袋に出て屋台のおでん屋の天井にバッグを乗せ食べたおでんはうまかった。

在学した当時は、どれほど専門の体育館があればと思ったかしれやしない。また部員諸君には不規則な練習時間や交通費の負担など悪条件下での部生活を強いる結果となった。

卒業してすぐに、早稲田大学に記念会堂建設の計画が起こり体育会OBに寄付の依頼があった。体育館探しで散々に苦労した私は、社会人になってまだ日は浅かったが直ちにながしかの寄付をさせてもらった。それから間もなく記念会堂は完成し、河野一郎さんの名前で立派な礼状が届いた。

日本鋼管チームの歩み

葛尾 和弘



月日の経つのは早いもので、我がチームが最初の天皇杯を獲得して50年を迎えようとしている。昭和24年度の全日本総合選手権大会で全文理大を43-36で破り、初めて天皇杯を獲得している。この年からの半世紀の戦績、足跡を今「日本鋼管バスケットボール部の歩み-最初の天皇杯獲得から50年」と称して部史をOB一同で作成中である。

この間天皇杯14回、全日本実業団12回、日本リーグ7回の優勝は我がチームの誇れる記録でもある。その他に98連勝記録、海外遠征等輝かしい記録を一つに纏め、残しておきたいとの願いからである。不幸にして、最初のメンバーの横山、高橋(実)、白神選手は亡くなっているが、池田、高橋(修)、山岸等多くのメンバーが健在なので、大いに健筆を振るっている。このように、約130名のOBの全員参加による手作りの部史を作成するのが今回の趣旨でもある。古い資料の整理、写真探しに苦労も多いが、50年の重みが伝わって来る作業でもある。有難いことに、寄稿文として新聞記者、NHKのアナウンサー、先生はじめ、競いあった嘗てのライバル達等からも多くの協力を頂いている。

但し、先述の3人に加え、木下武、糸山隆司等幾人かの名プレイヤーの追悼文を載せなければならないのは、改めて大変悲しい思いをしている。

年末の発刊を予定しているがどのような「部史」が出来上がるか、当事者の私共も楽しみにしている。それにしても一年で変わって行った助っ人外人選手には、作業の応援は期待できない。ましてや次の50年史は作れないではないかと心配している。

振興会の方々には是非ご一読をお願いしたい。

さいごのゲーム

黒坂 行二



大学チームの創部50周年を初代主将の小林豊さんを中心に祝った時は、週2回位はジョギングをしていて少しは動ける身体のもりであった。ところが40歳以上は超OBで、現役女子チームとゲームを組まれた。オヤオヤと思いながら割り当ての10分位をやってみると、それが実に手頃な相手なのである。スピードもそこそこだし、何より当たりが痛くない。こんな面白いバスケットならばたっぷり楽しみたいと1週間後の再戦を申し込んだら、親切な彼女達は受けてくれた。

当日いそいそと集まった仲間は6人。お嬢さん達を痛めてはいかんよと申し合わせて、軽快にのつもりだが実はモタモタと走り回って10数分、ジャンプシュートの左かかとを蹴とばされた。と思って見るとふくらはぎはブヨブヨ、足首はブラブラ。学生の頃に猛者名プレイヤーと名前を聞き知る先輩方が、失礼ながらたいした動きもしないのにアキレス腱を切るのが不思議だったが、まさか自分がとは。女子の肩につかまり、病院まで送ってもらった姿を、丁度中学に入ったばかりで父親のバスケットを見せようと連れて行った長男が、今でも時折からかうのである。応急手当だけで家に帰ったら追いかけるように電話があり、『病院はどこだ、もう一人切ったから』と。若い女性を相手に張り切るのは何事によらずいけません。

数週間後の株主総会で新任取締役として紹介されたときに松葉杖を突く醜態をさらす羽目となった。年寄りの冷や水も2回目は許されないの、それ以来シューズをはくのをやめ、これが私の最後の、しかし若いお嬢さん相手の華やかなゲームとなったのである。

3年前の七十周年の時に会長で現役の夏合宿にもお供した酒豪の名高い西村恒三郎さんもおられなくなった！。現役チームに口は出さないが、しかし伴忠重会長をお助けして、できるだけ応援するのが、私の今のバスケットである。テレビでNBA程ではないにしても巨漢相撃つ世界選手権で、身長172センチと聞く田臥勇太君が通用したら、この夏最高の涼気であろう。

バスケットボールから 学んだこと



櫻井 鴻 臣

今から40数年前、中学から高校にかけて過ごしたバスケット部時代の思い出は、かなりの部分がつい昨日の事の様である。

10年ひと昔というが、40年も前の事が鮮明に蘇ってくるのは一体何が有るからなのか？

それは、私がバスケットボールを通じて大切な事を学ばせてもらったからである。

バスケットボールは5人が1つのチームとして戦うものであるが、チームは監督・コーチはもとより、多くのチームメイトやマネージャー等によって支えられている。

私が学んだ事は、「各人が自分の全能力を発揮し、その上でチームとしての総合力を発揮する事の大切さ」である。

まず個人がベストを尽くす事が大切で、その為には不断的努力と工夫が必要である。

人の能力というものはもともと大小があり、努力によって飛躍的に拡大されるものではないが、努力と工夫を続ける事によって僅かではあるが向上するものであると私は思っている。

60歳近くなっても昔のバスケット部時代を鮮明に思い出すのは、きっと楽しかった事より苦しかった思い出の方が多かったからかも知れない。

現在の選手にとって身長の高い事は相当の必要条件かと思うが、昔でも身長がないよりある方が有利であった事に違いはない。

私は自分の身長で大きな人に対抗するにはどうするかを常に考えていた。それには敏捷性とジャンプ力の向上であり、特にジャンプは一発目が勝負であった。連続してのジャンプでは身長のある人にはかなわない事から、ジャンプ力そのものを可能な限り高めると共に、空中でのエリアをどれだけ確保するかが重要であった。

毎日がこのための努力と工夫の連続であったと、今振り返っても懐かしく思っている。

社会人としての今日、バスケット部時代の経験がどれだけプラスであったかと何時も感じ、また感謝しているところである。

努力と工夫、チームとしての協調、さらにチームを支えてくれる多くの人への感謝の気持！！私は何時迄もこの事を忘れず、また何時迄も自分の些かなりとも成長への糧としていきたいと考えている。



一寸乱暴な提言

成瀬 璋



一般紙の第一面に、今の日本にとって極めて重要な政治や経済のニュースを差し置いてサッカーW杯の記事が踊るという、狂気としか言いようのない日本初出場のW杯も予想通りの結果で終わった。

ひるがえってバスケットボールのW杯出場に関するマスコミの取り上げ方と今回のそれを比較したとき、あまりの落差の大きさに、ある種の憤りを感じたのは筆者ばかりではあるまい。NBAの記事にはある程度のスペースを割いて居るにも関わらずである。

昔は一般紙においても結構スペースを割いてバスケットの記事を掲載していたのに、最近は寂しい限りである。

マスコミとの関係は我々下々の者には判らない点が多々あると思うので、此处でそれを論じる事は本意ではない。要は日本のバスケットボール(特に男子)が世界レベルに達すれば、ある程度は改善されると考える。

そこで少々(多分に)乱暴な私見を述べさせて戴きたい。日本の男子を強くする方法。

その(一)：日本代表を全員「マイケル高橋」にする。

今の日本人プレーヤーは体型的にも能力的にも、昔に比較すれば数段進歩していると言ってよいであろう。しかしながら欧米人、特に黒人系の人達と比較したとき、基本的な身体能力は数段劣っていると言わざるをえない。体質が全く違うのである。大和民族の純潔な体質では限度がある。平面的にも立体的にも高度な運動能力が要求されるバスケットボールにおいては、この体質のハンデは致命傷であろう。1992年の冬、札幌で実連の山田会長と会食する機会に恵まれたとき、「永い年月をかけて日本人の体質改善をすることが必要であろう」と申し上げたことがあるのですが、勿論その時は笑い話で終わりでしたが、その数年後にマイケル高橋が突然日本のバスケット界に登場し、以後のバスケットに刺激を与えた事は皆様ご承知の通り。

その(二)：日本代表を協会専属のチームにする。

今回のサッカー日本代表もそうであったように、日本全ての競技の選手はアマ・プロの差こそあれ必ず母体チームに所属し、ことある度に選抜されてやっとチームを編成しているのが実情である。これでは強くなれない。母体チームと代表チームとでは選手の役割が異なることもあるだろう

し、第一チームとして活動する時間に制約がありすぎる。

高等学校終了までに選手の素質を見極めて、将来日本の代表たりうる素材は全て協会のチーム所属とし、他のいかなる単独チーム(大学・企業)にも所属させないようにする。

所謂協会直属のプロ選手である。現在日本は少子化が進行中で1990年以降、高等学校の運動部部員数は軒並み減少の傾向にあり、増加しているのは男子バスケットボールとサッカー等の限られた種目であると言う現実を厳しく受け止めて、素材の発掘と100%の活用の方法を探ることは急務であろう。

その(三)：協会専属プロチームは日本国内での活動をしてはいけない。

またまたサッカーの例で恐縮だが、見事なまでに世界の壁に跳ね返された原因に、私は国際経験の無さがあると思う。ヨーロッパ勢や南米大陸のチームとの真剣勝負をどの位経験したのであろうか。甚だしく疑問である。アジア勢とのゲームや外国チームを日本に呼んでのゲームをいくらやっても無意味だと思う。

バスケットにおいてもしかりで、協会専属のプロ集団は常に外国遠征(それも時々遠征に赴くのではなく、半年位のスパンで外国に滞在する)をして、精神的・身体的そして技術的にレベルアップを図る位徹底的に行わなければ効果は望めない。

問題は資金面と選手の将来の生活保証である。経済界で活躍されておられるバスケットボールの先輩方、何かいい知恵はありませんか。株式会社「日本バスケット」等の創設は出来ませんか。以上素人の戯言、真夏の夜の夢、酒の肴の笑い話にしてください。

バスケットボール振興について



浜本 清海

首題について本日は、2つ提案したい。

その1は、底辺の拡充ということ。世は今やサッカーブームで日夜沸いている。それも大いに結構であるが、私は小中生への指導について考えてみたい。小中生への普及指導は目立たなくて実に地味な仕事である。しかしこれがバスケット界の発展について、欠くべからざるものである。

現在中学校では、指導者不足もあって、学校での部活動が充分行われていない。そのため部活をやりたくてもやれない生徒が多い。そこで私は社会スポーツとして、市区町のスポーツセンター中心にクラブ活動を盛んにしたいと思う。一つの市のスポーツセンターへ市の五つの中学のバスケット愛好者を集めて指導する。その指導者に本振興会1会員が、ボランティアとして直接に指導する。または、クラブ活動の盛んなヨーロッパ、アメリカ、中国などのやり方を調査する。また日本の中でも高校生の活躍している秋田、名古屋、京都、北九州などのやり方等も発表して貰うなどして、いい所を学ぶことのできる資料を集める。

勿論それらの地区には、現在著名な指導者が居られる。その人たちに後に続く指導者を養成すること、その組織づくりが大切なのである。

昔小学校の教科書で、接木をする老人が、自分の居なくなった後人々に充分この柿の実を食べて貰いたいから、接木をしてるんだと言った文章を読んだことがある。

私たちの居なくなった後、日本のバスケットも堂々と世界に伍して、ワールドカップを競っているんだという日を夢見ながら、この目立たないが一番肝要な基礎作づくりにはげようではありませんか。

その2は、テレビ映像を殖やすことである。鶏が先か卵が先かの議論は、やりたい人にやらせておけばいい。私はテレビ映像が殖えれば人気は必ず上がってくるものと信じている。

昔蒲田地区の野球少年が神奈川地区へ移ったことがある。どうしてと聞いた所、「向こうへ行けば、テレビに出れるもん」と答えたと言ったことがある。この心理は今も変わらないものと思う。我々振興会としても一回でも多くテレビ放映されるよう、努力したいものである。

バスケットの思い出



松本 民子

私の通っていた中学校で、始めて女子のバスケット部を作るに当たって、教師に薦められたのが、私のバスケットを始めるきっかけでした。

それから、高校でもバスケット部に所属していましたが、高校の部活は、中学の時の楽しかったバスケット部と違って、非常に厳しかったことを、卒業して30数年たちますが、今でも思い出します。

私の高校は女子校でしたが、運動部独特の上下関係もありましたし、動きが悪いと怒鳴られるのはいい方で、ボールは跳んでくる、蹴とばされるといった具合でした。合宿の時など、足がパンパンに腫れて、歩けなかったことなどつらい事を思い出します。

しかし、今となっては良い思い出で、バスケットが好きだったんだ、バスケットをやっていた本当に良かったと思っています。

中学の部活の人達とは今でも時々会って、親交を深めています。バスケットに限らず、スポーツをやっていた人達は皆、スポーツマンシップを持っていて、一本筋が通っていると感じています。ですから、自分の子供にも勉強よりも、運動を部活を、しっかりやるように言い聞かせました。

娘が、ミニバスを始めるまでバスケットから遠ざかっていたのですが、私がバスケットをやっていたのをご存じの方がいらして、コーチを頼まれて六年間楽しませて頂きました。

それも、娘が小学校を卒業するとボールを手にもすることもなく、それから15年も過ぎてしまって、完全に昔の思い出になってしまいました。

バスケット振興会の事など知る由もなく、今回、徳永寿美様のお薦めで入会させて頂きましたが、振興会ニュースを読ませて頂きますと、皆様のバスケットへの熱い想いや、情熱が伝わってきて、私など中学、高校とやってきただけで、バスケットの末席にもいられないと、恥ずかしい思いで一怀です。

私とバスケットボール

渡辺 勝己



私は横浜で生まれた。昭和20年の空襲で横浜は一面焼け野原と化した。しかし、綿密な計画の元に行われた空爆のためか学校などの建築物は戦禍を免れて焼け残っていた。

まもなく米軍の兵舎が立てられ米兵が進駐してきた。しばらくして近隣の小学校や中学校の体育館に平らな板に籠のようなものが下がっているものが梁からぶら下げられた。何をするものか分からなかったが、やがて米兵がボールを持ってきて投げ入れたりするためのものと分かった。そして敵味方に分かれてボールを投げ入れたり、邪魔したりするゲームだということも知った。私が小学校3年生の頃のことでこれが私とバスケットボールの出会いである。その頃は主食にも不自由していた私たちにボールを拾うとガム（初めて口にした）やチョコレートをくれるので毎日体育館に通ったものである。当時は遊びといえれば野球ということもあってバスケットボールを始めたのは高校からで、指導者もいない弱小なチームであったので本格的に取り組んだのは日体大に入学後である。

そんな私が還暦後の今もバスケットボールと関わっていただけるのは多くの良き先輩、素晴らしい仲間との出会いがあったればこそと思っている。また、多くの教え子とつくった思いでの数々も忘れることができない。それらのすべてに心から感謝している。

これからは私を育ててくれたバスケットボールに恩返しをしたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻下さるようお願いいたします。

